

平成 29 年度自己評価シート（年度末評価）

校番	17	学校名	佐伯高等学校	校長氏名	高橋 光子	全日制	本校
----	----	-----	--------	------	-------	-----	----

学校経営目標							
達成目標	評価指標	前年度 実績値	本年度		評価	理由	担当 部等
			目標値	実績値			
1 主体的な深い学びを通して、夢や目標の実現に向けて真摯に取り組む生徒を育てる。							
①深い学び、聴き合う関係づくり、ジャンプ課題を設定した授業が推進され、生徒の意識・行動が変容している。	生徒授業評価アンケートにおける肯定的回答率	新規	80%	84%	A	・生徒授業アンケート（12月実施）結果では、1年生は80%、2年生は82%、3年生89%、全学年では84%であった	教務 教科
	「自分から進んで学んでいる」と回答した生徒の割合	新規	70%	79%	A	・生徒授業アンケート（12月実施）結果では、1年生は70%、2年生は77%、3年生91%、全学年では79%であった。	
②常に学び合う協働的な教職員チームとして、自らの資質・能力の向上を図っている。	授業公開回数（回/人）	2回	2回	2回	A	・常勤教諭（11人）の授業公開を年間22回実施した。	教務 教科
	校内協議会参加人数（年間平均）	新規	5人	5.1人	A	・年間22回の校内協議会を実施した。年間の協議会参加人数の平均値は、5.1人であった。	
③生徒一人一人の進路希望の実現に向けて、組織的に取り組む。	進路指導部による全生徒面談（回/年）	新規	2回	1.5回	B	・進路指導部による個別面談を生徒1人あたり1回以上行った。すべての生徒の希望進路を把握し、情報提供を行った。	進路 指導 学年
	進路検討会議（回/年）	新規	3学年 1回 2学年 2回	3学年 1回 2学年 1回	B	・3学年進路検討6月1回、2学年進路検討1月1回、全教員で会議を実施した。	
	第1希望の大学等合格率、就職内定率	新規	100%	81%	C	・進学希望、就職希望すべての3年生が第1希望の大学合格、第1希望の就職先内定を達成した割合は、81%であった。	

評価基準 A：目標を完全に達成した。 B：目標を概ね達成した。
C：目標をあまり達成できなかった。 D：目標をまったく達成できなかった。

【評価結果の分析】

- 12月に実施した生徒授業評価アンケートでは、学年が上がるにつれて、肯定的な回答をした生徒の割合が増加している。このことは、本校が取り組んでいる深い学び、聴き合う関係づくり、ジャンプ課題を設定した授業を通して、学びへの意欲が向上し、生徒の意識や行動が変容しているものと分析している。
- 「授業中、自分から進んで勉強します」と回答した生徒の割合も、学年が上がるにつれて、肯定的な回答をした生徒の割合が増加しており、入学後の指導を通して、生徒の主体的な学びが定着していると考えられる。(参考：県の平均値 45.4%)

生徒授業評価アンケート質問内容(抜粋)	肯定的な回答をした生徒の割合(%)		
	1学年	2学年	3学年
自分たちで課題を解決する学習の方が学びが深まる	67	85	87
授業のグループ学習、ペア学習は理解が深まる	96	92	90
授業中、自分から進んで勉強する	70	77	91
答えが違ったら、理由を確かめようとする	81	81	95
どんな順番で説明すると良いか考える	85	77	80
学年別平均	80	82	89
全学年平均	84		

- 進路指導部による面談を行うことで、個々の生徒の進路希望を常に担任と共有し、効果的な指導を行うことができた。
- 進学者では第1希望校に合格できなかった生徒2名、就職希望者では9月の第1希望の内定を得られなかった生徒3名、いずれも希望校、希望する就職先へのこだわりを持ち続け、最後まであきらめずにチャレンジした結果である。大学入試センター試験には2名の生徒が受験した。今年度も就職希望者の内定率は、早期のうちに100%を達成した。
- 組織的・計画的な進路指導を行った結果、次のような進路実績となった。

平成30年3月卒業生 進路状況(平成30年3月1日現在)

区分	進路先
大学	広島文教女子大学 人間科学部心理学部、福山大学 人間文化学部 岡山理科大学 応用物理学物理学科専攻、徳山大学 経済学部 吉備国際大学 保健医療福祉大学 作業療法学科
医療系専門学校	岩国YMCA看護医療専門学校、大島看護専門学校、日本指圧専門学校
専門学校	広島工学院大学校 自動車整備科、広島情報専門学校 情報システム専門科、コンピュータ教育学院 アスリートコース、穴吹デザイン専門学校、広島YMCA専門学校 医療事務科 ドクターズクラークコース、トリニティカレッジ広島医療福祉専門学校 医療秘書福祉学科、広島ビジネス専門学校キャリアビジネス科、西日本調理製菓専門学校、広島アニマルケア専門学校
就職	株式会社イワタ木工、安田金属株式会社、飯田運送株式会社、株式会社盛田、社会福祉法人三篠会 原、株式会社錦水館、株式会社スタイル、松井養魚業

【今後の改善方策】

- 授業公開を生徒の学びを見とる力を育成する研修の場として位置付け、引き続き教職員が参加できる機会を確保するとともに、事後の研究協議会をさらに充実させるために、校外視察の成果を取り入れるなどの工夫・改善を行い、教職員の指導力を高めていく。
- 進学希望者に対する補習等の指導体制を改善し、より早い時期から組織的・計画的な指導を行う。
- 就職希望者に対する適性検査、特に一般常識に関する対策を強化するとともに、1学期末からの指導体制を見直し、より組織的・計画的な指導を行う。

2 社会人としての基礎を培い、基礎的人間力を身に付けた生徒を育成する。

①自律心を育み、規範意識を考え実行できる能力・態度を育成する。	遅刻0回の生徒の割合(年間)	新規	80%	84%	A	・年間遅刻0回の生徒の割合は84%であった。時間を守ることの大切さを自覚し、行動できる生徒が増えた。	生徒指導 保健
	特別な指導対象者数(年間)	新規	1人	5人	C	・個々の生徒の自己指導能力の育成をめざし、組織的で丁寧な指導を行った。特別な指導対象生徒:1年生4名,2年生1名となり,昨年度より対象者が増加した。	
②生徒会活動,部活動,地域貢献活動等を活性化し,自己肯定感を高め,地域を愛する生徒を育てる。	主体的に学校行事等に参加したと考える生徒の割合	新規	90%	88%	B	・生徒アンケート調査において,肯定的な回答をした生徒の割合は1年生87%,2年生83%,3年生94%,全体では88%であった。	生徒指導 保健 学年
	自己に対する肯定的評価をしている生徒の割合	新規	70%	76%	A	・生徒アンケート調査において,肯定的な回答をした生徒の割合は1年生70%,2年生88%,3年生69%,全体では76%であった。	
③異文化交流等を通じて,グローバルマインドを向上させる。	異文化交流等の実施回数	新規	姉妹校受入1回	1回	A	・5月に,計画どおり姉妹校生徒17名を受け入れ,異文化交流を行った。	進路指導
④特別支援教育の視点をもった教育活動を推進する。	特別支援教育に係る研修会開催回数(年間)	新規	3回	3回	A	・年間3回の校内研修会開催及び校外の研修会へ積極的に参加した。また,校外での研修内容を校内で共有し,研修を深めることができた。	生徒指導 保健

【評価結果の分析】

- 生徒指導上の年間遅刻者数は,1年生1名,2年生12名,3年生0名であった。年間遅刻0回の生徒は67名(84%)であった。
- 特別な指導対象生徒は,1年生4名,2年生1名であった。特に,今年度1学年生徒は,自分の感情や行動をうまくコントロールできない生徒の割合が多く,特定の生徒が繰り返す状況がみられた。そのため,保護者と密に連携を図り,丁寧な特別な指導を行った。今年度,ひとり一人の生徒と向き合い,粘り強く組織的な指導を行った結果,全学年ともに,退学・休学・転学者0名であった。また,3年生は入学以来,退学・休学・転学者0名,特別な指導対象者も0名で卒業した。
- 生徒アンケートでは,次のとおり,すべての項目で,肯定的な回答をした生徒の割合が増加した。

また、学年が上がるにつれて、同様の傾向が見られた。これらのことから、目標値を完全に達成することはできなかったが、2学期に実施した体育祭、文化祭、周年行事、出前オープンスクールなどを通して、生徒が基礎的人間力を身に付け、成長していると考えている。

- 3年生で自己に対する肯定的評価が低下している原因は、何事にも真剣に取り組み、悩む生徒たちであり、アンケート実施の時期が進路先決定の時期と重なり、不安を募らせていたためではないかと分析している。

生徒アンケート質問内容(抜粋)	肯定的な回答をした生徒の割合(%)		
	1 学年	2 学年	3 学年
学校行事は、自分から進んで参加する	74	77	90
学校でみんなと一緒に活動するのは楽しい	100	88	98
自分の良さは、周りの人から認められている	70	88	69
学年別平均	81	84	86
全学年平均	84		

【今後の改善方策】

- 学校行事等において、さらに生徒が主体的に企画や運営ができるよう、教職員の支援の在り方の工夫・改善を行う。
- 学校行事等において、生徒の自己肯定感や達成感を高める視点をより明確に意識し、組織的・計画的な指導を行う。
- 特別支援教育研修会はもとより、通常の会議においても、特別支援教育の視点から生徒について協議を行う意識が高まっている。さらに特別支援教育会を充実させるために、専門家の指導による研修を充実させる。

3 地域から信頼される開かれた学校づくりを推進する。							
①中学校との連携や魅力的な広報活動を通して、生徒の募集に努める。	オープンスクールの参加者数	新規	40人以上	93人	A	・オープンスクールの参加者は、生徒56名、保護者37名であった。	総務
	オープンスクール参加者アンケートによる満足度の割合	新規	70%以上	97%	A	・参加者アンケートによる満足度の割合は、学校説明会の満足度98%、模擬授業の満足度95%で、平均97%という結果であった。	
②学校教育活動について、タイムリーな情報発信を行い、計画的かつ丁寧な広報に努める。	ウェブサイトの月当たり平均更新回数	新規	5回以上	7.4回	A	・4月から2月末までの期間に82回更新した。	

【評価結果の分析】

- 例年10月に実施していたオープンスクールを6月に変更して実施したため、生徒募集には非常に効果的なものとなった。また、地元中学校との連携を密に図るとともに、総務部を中心に精力的に県内の中学校に幅広く参加案内に出向き、女子野球部の活動を通じて県外の中学校にも案内を行った。その結果、目標値の2倍以上の参加者数となった。
- 今年度のオープンスクールの内容について、生徒による学校説明及び模擬授業等、中学生及び保護者の視点を取り入れた工夫と改善を行った結果、参加者に大変好評であった。

【今後の改善方策】

- 引き続き、地元中学校との連携を密に図るとともに、6月の時期に、生徒が主体となるオープンスクールを開催し、より一層、本校の魅力をPRし、生徒の募集に努める。また、今年度の課題を踏まえ、年度当初から企画・運営体制を構築し、工夫と改善を加え、より充実したものにする。

平成 29 年度自己評価シート（年度末評価まとめ）

校番	17	学校名	佐伯高等学校	校長氏名	高橋 光子	全日制	本校
----	----	-----	--------	------	-------	-----	----

経営目標	年度末評価				
	A	B	C	D	未確定
1 主体的な深い学びを通して、夢や目標の実現に向けて真摯に取り組む生徒を育てる。(7項目)	4	2	1	0	0
2 社会人としての基礎を培い、基礎的人間力を身に付けた生徒を育成する。(6項目)	4	1	1	0	0
3 地域から信頼される開かれた学校づくりを推進する。(3項目)	3	0	0	0	0
計 (16項目)	11	3	2	0	0

1 評価結果の分析

(1) 成果

- 全学年ともに、退学者0名・休学者0名・転学者0名であった。また、3年生は入学以来、退学者0名・休学者0名・転学者0名、特別な指導対象者(3年間)0名で卒業した。
- 平成30年度入学者選抜(I)志願倍率は、2.5倍という高い倍率となった。また、選抜(II)志願倍率は、1.13倍となり、8年ぶりに定員40名の入学者が確保できる見込みとなった。
- 本校が取り組んでいる深い学び、聴き合う関係づくり、ジャンプ課題を設定した授業を通して、学びへの意欲が向上し、生徒の意識や行動が変容した。
- 大学入試センター試験には2名の生徒が受験した。今年度も就職希望者の内定率は、早期のうちに100%を達成した。
- 例年10月に実施していたオープンスクールを6月に変更し、生徒による学校説明及び模擬授業等、中学生及び保護者の視点を取り入れた工夫と改善を行った結果、目標値の2倍以上の参加者数となった。内容についても、参加者に大変好評であった。

(2) 課題

- 生徒の希望する進路実現に向けて、早い時期から、本人及び保護者ときめ細やかな面談を行うとともに、模擬試験を受験させるなど、組織的・計画的で着実な取組が必要である。
- 日々の各授業において、ジャンプ課題を確実に設定し、学んだ内容を活用できる力を付ける必要がある。ひとり一人の生徒の習熟度に応じた個別の取組が必要である。
- 特に1学年生徒は、自分の感情や行動をうまくコントロールできない生徒の割合が多く、特定の生徒が特別な指導を繰り返す状況があった。ひとり一人の生徒の自己指導能力の育成をめざし、組織的で粘り強い指導が必要である。

2 今後の改善方策

- 授業公開を生徒の学びを見とる力を育成する研修の場として位置付け、引き続き教職員が参加できる機会を確保するとともに、事後の研究協議会をさらに充実させるために、校外視察の成果を取り入れるなどの工夫・改善を行い、教職員の指導力を高めていく。
- 進学希望者に対する補習等の指導体制の改善及び就職希望者に対する適性検査、特に一般常識に関する対策の強化を行い、より早い時期から組織的・計画的な進路指導を行う。
- 学校行事等において、さらに生徒が主体的に企画や運営ができるよう、日常的に教職員同士が相談し合える場を増やし、よりよい指導・支援の在り方を工夫し改善を行う。
- あらゆる教育活動において、生徒の自己指導能力及び自己肯定感や達成感を高める視点をより明確に意識し、ひとり一人の生徒と向き合うとともに、保護者との連携を密に図り、校内での報告・連絡・相談体制を確立する。
- 引き続き、地域、地元中学校との連携を密に図るとともに、生徒が主体となる行事等を開催し、より一層、本校の魅力をPRし、さらなる生徒の募集に努める。

3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策（学校関係者評価実施後に記入）

- 多様な生徒の進路希望を実現させるために、公営塾の活用、進学補習及び就職希望者に対する指導の強化を行い、更なる進路実績の向上を目指す。
- 授業公開は取組を継続し、現行の回数を維持しつつ、内容を充実させた取組を推進する。
- 引き続き、地域、地元中学校との連携を密に図るとともに、生徒が主体となる行事等を開催し、より一層、本校の魅力をPRし、さらなる生徒の募集に努める。

平成 30 年 3 月 30 日

様式 8

平成 29 年度学校関係者評価シート（年度末評価）

校番	17	学校名	佐伯高等学校	校長氏名	高橋 光子	Ⓐ・定・通	Ⓑ・分
----	----	-----	--------	------	-------	-------	-----

評価項目	評価	理 由 ・ 意 見
目標、指標、計画等の設定の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> ・とても適切である。 ・今年度、指標を大幅に見直したため、達成した姿がわかりやすい。設定は適切であった。 ・将来と佐伯高校の在り方を考えて設定されている。 ・主体的な深い学びを通じた人間形成ができる目標が設定されている。 ・生徒は主体的に学習しようとする自覚と自信に満ちている。
計画の進捗状況の評価の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・概ね適切である。 ・目標値と実績値の比較により評価している。 ・高校に入学し、生徒が大きく成長していくことができる計画である。 ・面談や会議・研修などの回数で測れる数値目標に加え、指導の内容の適切さを常に確認するアンケートを実施し、日常の教育活動にフィードバックさせている。 ・自ら学ぶという姿勢が、全学年で感じられる。特に3年生の行動が、1・2年生に良い影響を与えている。
目標達成に向けた取組の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> ・とても適切である。 ・生徒を丁寧に指導している。 ・学業、70周年記念式典、地域とのコミュニケーションともに充実している。 ・教職員がチームとして生徒の指導ができるよう情報共有を重視した指導が行われている。 ・学校行事の中で、生徒が主体的に取り組めるよう、細かな指導と生徒に自覚と責任を持たせる指導が機能している。 ・教職員が協働的に資質向上に取り組み、授業研究が自主的に行われている。
評価結果の分析の適切さ	B	<ul style="list-style-type: none"> ・概ね適切である。 ・就職において第一希望が 81%であり全員が決定しているので、もう少し評価が高くてよいのではないかと。 ・細かく、評価・分析がなされている。 ・進路指導は競争相手がいるため、校内の活動のように目標達成度を同列に扱うことはできない。目標達成のためのプロセスを生徒が理解し、希望する進路先に向けて頑張らせる指導が重要である。
今後の改善方策の適切さ	A	<ul style="list-style-type: none"> ・校内協議等を重ね良い方向で改善された点を評価する。 ・これまでの継続的な取組の成果として、志望する中学生の増加につながった。 ・元気で、笑顔であいさつできる生徒がいてほしい。地域の方も元気になれる。 ・生徒の多様な進路を実現するために、進学補習を期待する。

		<ul style="list-style-type: none"> ・部活動，勉学，ボランティア等，生徒の活動を広く地域や中学生にアピールして欲しい。 ・進路検討会議を全教職員で実施し，生徒一人一人の課題を共有し指導していることが，成果を上げている。
総合評価	A	<ul style="list-style-type: none"> ・少子高齢化，過疎化が進んでいる地域の小規模校として，良く頑張った。地域，行政の支援も大きかった。 ・多くの入学生を迎えてスタートする新年度に注目が集まる。今後も地域の中学校と密な連携が不可欠。 ・先生，生徒，地域の思いが一つになり良い成果が出ている。 ・生徒は，3年間の学校生活に満足感を持って卒業した。現状に満足せず，より高い目標を持つことができる主体的な生徒が育っている。 ・地域及び学校の特性を活かした教育活動の成果が出ており嬉しく思う。授業公開には，今後とも期待している。 ・卒業式は実に感動的だった。 ・基本的人間力を身に付けた生徒の育成が感じられる。